

石川三四郎の反進化論

小澤 萬記

(人文学部人文学科)

On the Antievolutionism of Isiawa Sansiro

Kazunori OZAWA

(Department of Humanities, Faculty of Humanities and Economics)

0

モースによる本格的なダーウィニズムの紹介によって、日本における進化論の時代は始まる。それは、近代日本をある意味では特徴づける科学信仰を背景として、自然科学の分野のみならず社会科学や人文科学の分野においても（いや、むしろそれらの分野においてこそ）絶大な影響を与えたのである。これを単に、本来の自然科学分野の仮説が誤解によって他の分野にも適用された、とのみ評価するのは一面の真実でしかない。たしかに、明治期の日本がヨーロッパの近代科学をそれ自体として受け入れるための基本的素養を欠いていたにしても、もともと進化論が自然科学という限定された分野を越えた影響力をもつ可能性を持っていたこともまた事実であるからだ。なぜなら、進化論とは世界に関する一つの全体的イメージに他ならないのであるから。

そのように考えると、日本に於けるさまざまな分野での進化論の影響と、進化論そのものの変容を考えることは、科学史のテーマであるだけではなく比較文化的な領域の課題であると言えることができるだろう。

日本における進化論（ダーウィニズム）の受容の特質のひとつは、ヨーロッパ世界の場合と異なって宗教との軋轢という局面をほとんど持たなかったということである。これに替わって大きな問題となったのは、それがはらむ「優勝劣敗」という考え方と「人権」や「平等」という社会思想との対立である。その事が典型的な形で現れたのは、加藤弘之のいわゆる「転向」であるが¹⁾、この問題は「社会主義（アナキズムも含む）と進化論」という問題として形を変えて明治末から大正期にも持ち越されることになる。堺利彦、幸徳秋水、山川均、大杉栄らの人々が程度の差こそあれ進化論に関心を寄せている事は既に指摘されている通りである²⁾。例えば、この中で進化論に対してもっとも深い関わりがあった大杉の態度は一つの典型を示しているといつて良い。すなわちその姿勢は進化論は受け入れながら、ダーウィニズムの含む「生存競争」の概念は拒否し、それに替えてクロボトキンPyotr Alekseevich Kropotkin (1842~1921)の相互扶助の思想をもって来るというものである。すなわち、ここには社会変革の論理を支える理論として進化論を取り入れながら、その「社会ダーウィニズム」的側面は社会主義の原理と背馳するが故に全面的に受け入れる訳には行かない彼のジレンマが現れている。

このような一連の社会運動家たちの反応の中に置いてみると、アナキスト石川三四郎(1876~1956)のとった姿勢は極めて特異である。すなわち進化論の全面的な拒否という態度である。本論文では、この石川三四郎の反進化論を検討し、「社会主義・アナキズムと進化論」という

問題群におけるその意味と明らかにしたい。

1

石川三四郎は1876年、埼玉県に生まれた。1901年東京法学院卒業後、『万朝報』記者を経て、平民社に参加、社会運動に身を投じる。日刊『平民新聞』編集発行人となり、1907～8年入獄。大逆事件後の1913年ヨーロッパに渡り、カーペンター Edward Carpenter (1844～1929)、ルクリュ Jean Jacques Elisée Reclus (1830～1905) と交わる。1920年帰国後日本フェビアン協会などに参加。1927年から「土民生活」(この言葉の意味については以下に述べる) の実践の為に世田谷で半農生活に入る。その後はルクリュ研究会を主催するなどアナキズム運動に関わり続けた。戦後の46年には日本アナキスト連盟の顧問に就任する。この様に一貫して実践活動に携わったが、むしろ彼の存在の意義は、政治的实践よりもその個性的な生き方や思想にあった³⁾。ここでは、進化論の問題にしばって彼の思想を検討して見たい。

彼の進化論に対する反駁の書として最も代表的なものは関東大震災の翌々年1925年の『非進化論と人生』である。この時石川は49歳。そもそも彼の進化論に対する疑いが最初に生じたのは創刊されたばかりの『平民新聞』の発行兼編集人として1907年に東京監獄に入獄したときであるという。自伝にはつぎのようにある。

この獄中生活は私の思想に多くの生産を与えました。第一に進化論否定の萌芽を産み、第二に古事記神話の新解釈に目標を与えました。進化論に懐疑し始めたのは、カーペンターの『文明論』とクロボトキンの『相互扶助』とを読んだ結果であります。クロはダーウィンの進化論の一部面を強調するために『相互扶助』を書いたのであるが、不思議にも、それが私に進化論否定の動機を与えたのであります。あの書を読むと、諸動物間に行われる相互扶助は人間界に行われるそれよりも一層純粹に本能的であって有力であり、その点から言えば、少なくとも今日の人間界はある動物より遥かに退歩したものと言えるのであります。人間でも古代の人間の方が近代人よりは一層純一であり、道義的であったと言えるのであります。それはカ翁の「自我の分裂」の歴史「人間墮落の意義」と対照して、深い考察点を指示するものであります。わたしは新世界の鉄の扉が開かれたような気持ちで目を見ひらきました。⁴⁾ (『自叙伝』)

文中、言及のあるクロボトキンの『相互扶助』は1902年に書かれ、大杉栄による翻訳は1917年に出ている。大杉らのアナキスト、社会主義者によって、クロボトキンが盛んに読まれたのは、既に触れたように、それがダーウィン主義の含む競争原理に対する、ある種の中和剤の機能をはたすと考えられたからに他ならない。即ちこの相互扶助という考え方を導入することによって、ダーウィン主義に含まれるマルサスの要素が排除され、それによって、進化論それ自体は救う事ができる。ところが石川はこのような立場を越えてさらに先へすすんだのである。

即ち進化論そのものの否定である。

進化論否定の萌芽を得たというこの入獄期に、石川は自伝にもある通り、生涯にわたって影響を受け続ける事になるカーペンターの著作を知り⁵⁾、またカーペンターと並んで彼に大きな影響を与えた田中正造とも始めて会っている。そして獄中での社会運動史の勉強の成果は『西洋社会運動史』(1913発行と同時に発売禁止)として結実することになる。すなわち、この入獄の前後の時期は彼の思想形成に極めて大きな意味を持っており、進化論に対する彼の批判も、彼の思想の全体と密接に結び付いているのである。

2

石川の進化に対する考えかたを最も明確な形で示しているのが『明星』大正十二年四月号に掲載された「進化とは」と題するエッセイである。この、後に『非進化論と人生』に収録されることになるエッセイの冒頭で、石川は次のように言う。「地球の表面に棲息する総ゆるる生物は、もと単純な一種あるいは少数の種類から分化して最後の人類が最も完全に近い形態を以て生れた。」そして、「生存競争、自然淘汰、適者生存、等の原則は、一種宗教的の權威を持った教義ドグマとなって世界の人心を支配することになった。」更に社会学者達は「社会は益々パアフェクションに向かって進みつつある」と主張しているという。⁶⁾

この三つの論点が石川の進化論観の中心を為しており、同時に彼の進化論批判の対象となるものである。この論点のそれぞれは1 進歩主義 2 科学信仰 3 社会進化論に分類することができる。そしてこの三者は、「進化という事実の承認」(1)、「そのメカニズムに関する自然科学上の仮説」(2)、「その社会への応用」(3)と段階を追って展開されている。一般に「社会主義・無政府主義」と「進化論」との関係は共感と反発の過程であり、社会主義者ないしは無政府主義者によるその批判が進化論のどの部分に向けられているかにその人物の社会観の特質が現れる。そして、この三つの論点は多少の形は違ってもこれらの議論に共通しており、その一つの段階で進化論を批判したとしても、その前の段階の議論は有効で有り得る。つまり、例えば人間社会への応用は否定しながら自然界に於ける「生存競争」というメカニズムは肯定できる。大杉栄の場合それは「生存競争、自然淘汰、適者生存等の原則」に対する批判としてあらわれる(1、2間での切断)。従って、彼にあっては進化という事実(ないしは仮説)そのものは疑われることはない。これに対して石川の議論の特徴はこの三つの論点をその第一番目から否定していることにある。

とはいえ、進化論を否定するといっても、当然のことながら、ここでは創造説は問題とはならない。石川の攻撃は主として「進化」と結び付いた「進歩」の観念に向けられている。ダーウィニズムが進歩の観念を前提としているかどうかについては大いに議論の余地があるが、その事はひとまず置いて、石川の議論を以下追ってみることにする。

石川の進化論批判の第一の論拠は種概念と「進化」の概念との矛盾である。

何故に諸生物の諸形態が成立したかといふことは明証することができない。下等動物は高等動物と同じ様に、その境遇に適用したる生活様式を備へて居る。⁷⁾（「進化とは」）

即ちここで問題になっているのは、種概念が含む安定性のイメージと進化概念の含む変化のイメージとの矛盾である。それぞれの種が環境に適應しているとすればそれはその状態で安定するはずであり、進化は有り得ないことになる。

二番めの批判点として石川はド・フリースHugo Marie De Vries (1848~1935)による「突然変異説」と「仏蘭西のルネ・カントン氏」の「鳥は人類より後に地上に発生した」という説を引き合いにだす。この二つの議論が何故進化論に対する批判点として提示されるのか。一般的には突然変異説は進化のメカニズムについて一つの仮説であって進化論そのものと根本的に対立するものではないと考えられる。しかし、石川にとってはそうではない。彼がここで反駁を試みている進化論とは漸進的進歩の観念と一体となったものであり、突然変異によるランダムで(進歩に反する)急激な変化(漸進主義に反する)は石川が考える進化の観念からはずれるものである。他方ルネ・カントンの説は、進化論の含む進歩主義、即ちあとから出現したものがより高等である、という前提に対する反論と成りうるものとして提示される。

三番目に問題となるのは「高等」「下等」という概念である。石川によれば、それを身体や社会組織の複雑さによって定義することは不可能である。なぜなら、いずれの点においてもいわゆる「下等」な存在の中に極めて複雑なものが含まれているからである。このように、「下等」と「高等」の区別があいまいであるとするならば、このようにあいまいな概念によって「進歩」が裏付けられているのはなぜだろうか。石川はこの根拠を人間の「自惚れ」と「虚栄心」に求めている。つまり「自惚れ」とは人類は万物の霊長であるという観念であり、「虚栄心」とは現代は往時よりも進歩し将来は現在よりも進歩するという思い込みである。この二つが進化論によって裏書きされるのが人々によってこの進化論という仮説が支持された理由であるという。

このように、石川の進化論否定はむしろ進歩の否定である。ここで進化の究極の目標である「完全性」が問題となる。「完全性」について石川はつぎのように述べている。

我々は勿論、個人あるいは社会の「完全な」生活を理想とするの能力と之を実現する為に努力するの自由とを持って居る。其れは孟子の所謂「四端」といふ様な一種の本能的感情から湧起する所の観念である。此の悲惨な生活を見て慨くのも此心である。世の不義不正を見て憤るのも此心である。そして此心の不満を充たす為に個人或は社会の理想的生活を描く処に完全といふ思想が生まれて来る。是れは進化の標的ではなくて我々の要求なのである。⁸⁾ (「進化とは」)

進歩というものがもしあるとすればそれはこの「完全」に向かう運動としてしか有り得ない。だが見たようにこの「完全」の概念は本来主観的であり、内容を明確にしなければ客観的たりえないものである。その部分が進化=進歩のイデオロギーにおいては転倒している、と石川は主張する訳である。即ちそこでは単に進むことが自己目的化され、他方で「完全」は彼岸化されることになる。「円の周辺を限り無く回ってそれを進歩と唱えて居る」というわけである。

3

石川のこの進歩史観に対する攻撃をよりはっきりした形で示したのが、『社会主義研究』第58、59、60号(1924年5、6、7月号)に連載された「進化論と社会主義」である。このエッセイは三つの部分に分かれる。その一が「進歩及び進化」、その二が「進化論」、その三が「進化論の疑点」である。この各章の見出しからも伺えるように、議論は社会イメージの問題がまずとりあげられて、続いて進化一般の話へと中心が移っていく。まず石川は現代文明の背景に進化論があるとして、それを「新は真にして又美なのである」「大道廃れて仁義あり、仁義棄てられて生存競争がある」と要約する。大杉栄ら多くの社会主義者・無政府主義者にとって重要だったのは石川のこの言葉の中にある「生存競争」の概念を否定することであったのだが、ここで石川が否定しようとしているのは、生存競争よりもむしろ進歩史観であるのは2で見た通りである。

まず標的とされるのは「社会進化論」である。彼は言う「科学的社会主義は社会進化論に基礎を置いて初めて成立する」。⁹⁾ この命題の当否についての詳細な検討はひとまず措くとして。ここでは、前進論的進化論、社会進化論、進歩史観が同一の直線的時間意識を共有していることのみを確認しておけば足りる。即ち、ここで攻撃の対象になっているのは「歴史的必然性」の概念なのである。更に、進歩思想の歴史をしばらくおさらいしたあとで、再び同じ命題が繰り返される。

此、社会進化の事実と原理が認められなければ所謂科学的社会主義は成立しないのである。¹⁰⁾ (「進化論と社会主義」)

この繰り返しは、石川がこの文章のなかでかなりはっきりと、マルクス主義を主要な敵として意識していたことを示しているだろう。そして、ここでも石川が依拠するのは「進歩」という事実にたいする疑いなのである。すなわち、

各個人にそれぞれ特殊な人格と使命とがある様に各時代、国民にもそれぞれの特徴と文化とがある。¹¹⁾（「進化論と社会主義」）

それぞれの文化、時代が固有の価値をもてば、進歩は否定されることになる。その二「進化論」に於いては「ドラアジ氏及びゴールドスミス氏の『進化論諸学説』」に拠りながら、進化論の問題点を指摘する。¹²⁾ その三「進化論の疑点」に於いては、論点は2つである。まず第一は「適応」と「進化」の矛盾、第二は「進化論」に対する反対論である。ここで石川が特に強調するのはルネ・カントンの「生命の原則は変化に非ずして保守」であるという説である（この点については後で触れる）。更に石川はメチニコフ Élie Métnikoff (1845～1916) の『人性論』に拠って万物の霊長であるはずの人間の不完全性を指摘する。これは「進歩」の究極の目標であるはずの人間が不完全であることが「進歩」の観念の批判となりうるからである。そして「複雑化」「分化」を進歩とは見なしえないという形でスペンサー Herbert Spencer (1820～1903) に対する批判が為される。かくして、石川の議論は「進歩」そのものの否定にいたることになる。ごく常識的な事だが、進歩主義とは単純に言って時間の経過に伴って物事（社会であれ、生物体であれ）が良くなって行くという一つの時間意識である。¹⁴⁾ とすれば、彼が行ったように「進歩」の観念を全否定する時には、その背景にある時間意識も否定されることになるだろう。「進化とは」においては、ホラチウス、プラトンなどをひきながら「時間は却つて世界の価値を減ずる」という思想が紹介されている。すなわち、石川は進化ではなくて「退化」を特質とする時間イメージを提起するのである。

4

石川にあっては歴史は次第に進歩するものではなくて、人類は次第に墮落しているものと捕らえられる。したがって、過去は理想化される。

始め自然の子として、自然の神秘を讃めたたえて生活した原始人類は、お互いに平等に平和に共同の生活を行つたであらう。其社会生活は実に完全な自然愛の充実した社会であったに相違ない。¹⁵⁾（「原始黄金時代の回顧」1925年）

ところが、「文明化」によってそのような「平等」で「平和」で「自然愛」にみちた生活は失われてしまう。ここには「所謂『文明』を以て一種の疾病だと」主張しているエドワード・カーペンターの考え方が大きく影を落としていることは言うまでもない。例えばギリシアの美術を例に挙げて石川が執拗に主張するところは、このような文明化による退化の仮説なのである。

それでは、このような退化は何ゆえ起こったのか。例えばギリシアの社会が衰退したのはそれが「地の利を得て勃興した」にもかかわらず、「其地の利を乱用して却つて地を離れ地を忘れた」為であるとする。ここで石川が「地」と呼ぶのは「大地」そのもの、すなわち、農耕生活である。とすれば、石川が理想とする未来社会がどのようなものであるかは、自明であろう。彼はカーペンター

のデモクラシーの概念を「土民生活」と訳して次のように言う。

抑も吾等は地の子である。吾等は地から離れ得ぬものである。地の回転と共に回転し、地の運行と共に太陽の周囲を運行し、又、太陽系其ものの運行とともに運行する。吾等の知恵は此地を耕して得たるもので無くてはならぬ。吾等の幸福は此地を耕やすにあらねばならぬ。吾等の生活は地より出で、地を耕し、地に還へる、是のみである。之を土民生活と言ふ。真の意味のデモクラシーである。地は吾等自身である。¹⁶⁾ (「土民生活」1921年)

この考え方の農本主義的側面を彼の実験経験から来るものと考えてはなるまい。そもそも、フランスでまずこの「地に還へる」という思想を実行しようと試みたときには、ジャガ芋が地中に出てくるといふことすら知らなかった彼なのである。¹⁷⁾ この農本主義的思想を支えているのはあくまでも「自然は美しい。山下林間の静寂地に心の塵を洗ひ、水辺緑蔭の幽閑境に養神の快を食るといふ様な事は誰しも好ましく思ふ処である」¹⁸⁾ (「我らの使命」) というような観念的、ないし審美的な自然観である。

大杉栄らが依拠したクロボトキンによる「相互扶助」の考え方に石川も言及はしている。(「農民自治の理論と実際」)。しかし、大杉と異なって石川の場合にはむしろ彼の「退化思想」を裏付けるものとして論じられている。すなわち。

進化論者は人間は最も進歩したものだといふが、蟻や蜂のほうが遥かに道徳的であって、人間は悪いほうへ進歩しております。¹⁹⁾ (「農民自治の理論と実際」1927)

このようにして、進歩思想を、そしてそれと同根と見なす進化論を石川は共に拒否した訳であるが、進歩思想を拒否する事は新たな問題を引き起こすことになる。つまり進歩主義は、理想とする未来社会の根拠をそれ自身のうちに「歴史的必然性」の観念として持っているけれども、「退化思想」はそのものとしてはニヒリズムに墮して行く以外にはなく、彼の構想する「未開」に回帰した「土民生活」など実現されようが無いという事である。「必然」の概念に対抗するために彼は「自由」の概念を持ち出す。いわく「社会進化の必然の結果として」おこる「革命は吾々を駆って奴隷に陥れるもの」であり、「自由」の侵害であるという(「吾等の自由と連帯責任」1925)。だが、「自由」が保証するのは多種多様な理想の併存という状態であって、それ自体としては普遍的な妥当性をもった一つの理想の根拠は与え得ない。そのとき彼が依り所とするのは、「常住」の概念である。この考え方は、退化と平行してあるいは未分化な形で彼の著作の中にしばしば顔を出している。既に触れたルネ・カントンの説く生命の法則は変化や進化ではなくて「常住」であるとの説を紹介した後で、次のように続ける。

若し生命の法則が常住であるならば、何故に人類は原始黄金世界を棄て去ったか。此疑問は最初の一考察に於て起される事柄である。併しながら、私の見る所では、之れは極めて簡単な説明にて氷解される問題である。蓋し生命の法則が常住であればこそ、人類の生活には墮落又は向上と見られる事実、進歩或は退歩と見られる事実、完全又は不完全といふ思想も起るのである。之に反し、若し生命が其環境に適応して常に進化するものとすれば、如何なる生物も常に完全に其環境に適応して常に進化するものとすれば、如何なる時代の如何なる生物も常に完全に其環境に応じて其生活を保持し、向上も墮落も、進歩も退歩もない訳である。要するに向上とか墮落とか言ふことは、生命の原則に常住性が認められて後、初めて起こる問題である。²⁰⁾ (「原始黄金

時代の回顧」)

この常住性は、「土民生活」において「エヴオリュションといふも、輪廻の渦にあらはるる一小波動に過ぎない」²¹⁾という言葉で表現されている。石川はカーペンターによって与えられたものについて、「従来の宗教思想も芸術も農工業もすべてを一つの熔炉に入れ」と表現する。すなわち、それは彼の中にあった「宗教と社会主義と人生観の間に存在した多くの不統一点、無融合点を照らすべき、新しい光」（『自叙伝』）であった。宗教との関わりに限定すれば、「退化」「墮落」の観念がキリスト教によって与えられたものであり、「常住」の観念は（そのきっかけはルネ・カントンの説であるにしても）石川の中では仏教的なものとして理解されている。こうして、「常住」の観念によって与えられた規範によって、「退化」の必然性に対抗すること、これが石川の取った戦略であった。

繰り返すまでも無く進化論は、進歩思想をその背景として持つにしても必ずしも必然的にそれと結び付く訳ではない。むしろ、石川思想には、世界の「漸進的变化」という進歩主義との共通点があり、ある意味ではその転倒した形態であるとも言えるかもしれない。したがって、石川の主張は進化論の批判としては、やや厳密さを欠き、進歩思想の批判としてもそれほど有効性を持つ訳ではない。それなら、その思想はどのような意味を持っているのであろうか。

石川が行った「自由」を媒介にした進化思想との対決は、進化の全否定という極めて特異な位置にある。つまり、石川がここで否定しようとしているのは進化論に含まれるあれやこれやの要素ではなく、「科学」なるものによって「当為」が決定されうるというイデオロギーなのである。石川の進化論批判の陰に彼の科学的社会主義に対する批判を読み取ることはそれほど困難なことではない。「進化とは」が書かれた1923年がどのような時代であったかを確認してみると、1920年には高島素之の『資本論』訳が出版され、翌1921年頃からアナキスト派とマルクス主義派の対立が激化し始め、1922年には日本共産党の結成を見ている。このような時代背景に置いてみる時、彼が「歴史的必然」という考えを拒否したとき主要な敵として想定していたのはどの勢力だったのかということはあきらかだろう。

彼は進化論が未来社会の到来を保証するものであるにも関わらずそれを拒否したのではない。むしろ逆に、それが理想社会の到来を保証するがゆえに拒否したのである。なぜならば、それは人間の自由に反するものだから。だが、そうして得られた石川の理想社会は殆ど現実貫徹力をもたない。なぜならば、進歩主義が「完全」を彼岸化したという彼の主張とちょうど対になった形で、「現在」における「完全」が例えば農耕生活の実践というような個人の生き方の問題へと還元されることによって、社会の全体としての変革は、限りなく彼岸化されるからである。そしてその彼岸化された理想社会は観念的なものとしてしか提起し得ない。なぜなら、「必然」に対抗する彼の「自由」の概念によって与えられたあるべき未来のイメージは多様であって一つの像を結ぶことができないからである。²²⁾ 一方、逆にこのことは石川が拒否した「歴史的必然性」の概念が、現実の運動の中で当時もっていた「フィクションとしての有効性」を物語っているのではないだろうか。

注

1) 加藤の「転向」と進化論との関わりについては、鶴浦裕、「近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開」『講座 進化』2、東京大学出版会、1991] 参照。

2) 八杉竜一「日本の思想史における進化論」[ピーター・J・ボウラー（鈴木善次他訳）『進化思想の歴史』上、朝日新聞社、1987] IXページ以下参照。

3) 臼井吉実が石川について、「石川三四郎は人間とは何かということをはっきりした形でつかんでいた人だと

思います」と述べている。(大原緑峯『石川三四郎』、リポレポート、1987、31ページ)

- 4) 『石川三四郎著作集』 8、青土社、1977、200～201ページ。
- 5) カーペンターに関しては、1912年に『哲人カーペンター』を著し、更に晩年になってからもその影響は衰えず、1949年、73歳の時に『文明、その原因及び救治』を訳出している。
- 6) 『石川三四郎著作集』 2、青土社、1977、319ページ。
- 7) 同上 321ページ。
- 8) 同上 325ページ。
- 9) 同上 342ページ。
- 10) 同上 344ページ。
- 11) 同上 346ページ。
- 12) 同書の指摘するのは「我らの心理的生活の起源は如何であるか?」「この方面において進化思想の勝利が尤も困難なことは当然である。」というダーウィンも苦心した人間の意識の起源である。だがダーウィンの場合最も腐心したのがキリスト教との関係であったのに対し石川にあってはそのことは問題となりえない。
さらにかれば、進化論の背景にある地球観についても述べる。地球の歴史に関する考えかたには、1 激変説、2 進化論 3 現実説の三つがあるという。この考えかたの流れをギリシアから中世を経て近代に至るまでたどりながら、激変説にのって進化論を批判しようとする。ただし、その場合「コウした激変的現象は、強ち漸進的な進化現象を無視する訳には行くまい」と付け加えるのを忘れない。
- 13) 「適応」と「進化」の矛盾とは、生物が環境に適応しているとすれば、『生存競争』の原則は最早、其下等生物を向上させる様な作用を起こさないのであるか」という疑問が生じることである。
- 14) 「進歩に対する信仰、即ち、人類の歴史は望ましい未来に向かって大なり小なり継続的な運動の形をなしているのだとする観念は、17世紀の末頃に形成され始める。根強い批判があったにもかかわらず、それは着実に勢いを増して行った。」(『西洋思想大事典』、平凡社、1990)
- 15) 『石川三四郎著作集』 2、371ページ。
- 16) 同上 313ページ。
- 17) このエピソードは「馬鈴薯からトマト迄」(『石川三四郎著作集』 2)にある。
- 18) 『石川三四郎著作集』 2、410ページ。
- 19) 同上 425ページ。
- 20) 同上 384ページ。
- 21) 同上 311ページ
- 22) 「常住」概念が与えるのは理想化された過去のイメージにすぎない。

平成6(1994)年9月26日受理

平成6(1994)年12月26日発行